

## 第 1 回高等学校改革プラン推進委員会（第一推進委員会）議事録

- 1 日時 平成 17 年 5 月 29 日（日）午後 2 時 00 分～午後 4 時 00 分
- 2 場所 長野県庁 西庁舎 401 号室
- 3 出席委員

中村 正行委員長	牧 重信委員
森野 貞雄副委員長	若麻績 享則委員
青木 一委員	坂口 昌夫委員
小山 元彦委員	小山 壽一委員
塚田 芳樹委員	丸山 稔委員

### 4 開会

（三澤高校教育課教育支援主事）

それでは、早いかもしれませんが、ただいまから第 1 回高等学校改革プラン推進委員会を開催させていただきます。

私は、第 1 通学区の推進委員会を担当させていただきます、高校教育課教育支援主事三澤でございます。よろしくお願いいたします。

本日は委員長の選任までの間、司会を務めさせていただきます。なお、本日の委員会は、委員長の選任後、委員長と事務局との打ち合わせのため 5 分程度の休憩を取らせていただきますので、あらかじめご了承ください。

それでは、今回は第 1 回の委員会でございますので、委員の皆さまに自己紹介をお願いしたいと存じます。それでは、青木委員さまより自己紹介をお願いいたします。

（青木委員）

中野市長の青木と申します。県の市長会の中で総務文教委員担当のブロックにおりますので、その立場の中から県の市長会のほうからこちらへと役割分担を仰せつかった、そういうところでございます。よろしくお願いいたします。

（小山（元）委員）

飯山市の教育委員長の小山元彦でございます。北信地区の市教育委員会のほうからということで参加しております。よろしくお願いいたします。

（森野委員）

飯綱行政組合教育委員長の森野であります。飯綱といいますと、三水との合併をじき控えておりますので、どうなるやら私の進退も分かりませんが、そんなようなことで、よろしくお願いいたします。

( 塚田委員 )

薦友印刷の塚田でございます。長野県の経営者協会からの推薦ということでかかわらせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

( 牧 委員 )

長野県経営者協会の推薦でありまして、微力でございますけれども委員を仰せつかりました株式会社ニッソーの牧と申します。よろしくお願いいたします。

高等学校の関係の団体委員というのはほとんどございまして、地元の須坂高校のPTA会長を数年前にやっておりました。会社のほうも、私は半分半分、海外と生活していますので、多分出られない時期もあるかと思っておりますけれども、よろしくご指導をお願いします。

( 中村委員 )

信州大学の中村正行といいます。昨年、保護者の立場で懇話会のほうに参加させていただきまして、座長を仰せ付かりました。

この推進委員会のほうは大学の立場、助教授の立場で参加させていただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

( 若麻績委員 )

こんにちは。

柳町中学校の保護者ということで、本年度たまたまPTA会長を仰せつかりまして、このような形になったと思います。若麻績と申しますけれども、よろしくお願いいたします。

( 坂口委員 )

失礼いたします。

長野市立櫻ヶ岡中学校の坂口昌夫でございます。県の中学校長会という立場でこの席にかかわらせていただいております。よろしくお願いいたします。

( 小山 ( 壽 ) 委員 )

飯山北高等学校の小山と申します。よろしくお願いいたします。

校長会のほうからこちらのほうに推薦されてということでございます。よろしくお願いいたします。

( 丸山委員 )

高校の現場から一般の教員ですけれども、丸山稔と申します。中野高校で今、生活指導その他の仕事をしております。よろしくお願いいたします。

( 三澤高校教育課教育支援主事 )

ありがとうございました。

本日ですが、あと坂城町町長の中沢 ( 一 ) 委員様、元教員評価検討委員の市川委員様、須坂高等学校保護者の清水委員様、屋代中学校教員の宮本委員様の4名が委員となっております。

りますが、本日は都合でご欠席されておりますので、ご紹介させていただきます。

続きまして、委員長の選任をお願いしたいと存じます。委員長の選任につきましては、高等学校改革プラン推進委員会設置要綱の第5条の規定により、推進委員会は委員長を置き、委員が互選するとなっております。いかがいたしましょうか。

（坂口委員）

それでは、今の委員の自己紹介の中にもございましたが、中村正行信大工学部の助教授先生をお願いしたらどうかと。紹介の中にもございましたが、懇話会の座長というような形でこの高校改革プランにかかわっておりますので、適任ではないかなということで推薦申し上げますが、いかがでしょうか。以上であります。

【拍手】

（三澤高校教育課教育支援主事）

ただいま坂口委員から、中村委員にというご発言がございましたが、今、拍手していたのとおり、ご異議がないようですので、中村委員に委員長をお願いしたいと存じます。では、中村委員長におかれましては、委員長席のほうへご移動をお願いいたします。

ここで、会の進行について、打ち合わせのお時間を少しいただきたいと思いますので、約5分ほど休憩をお願いいたします。14時15分に再開いたします。

【休憩後再開】

（三澤高校教育課教育支援主事）

それでは会議を再開いたします。

では、まず中村委員長のごあいさつからお願いいたします。

（中村委員長）

あらためまして、信州大学工学部の中村正行といたします。

昨年度、懇話会の座長ということで、主に多くの皆さん方のご意見を検討委員会のほうにお伝えするというような役割を務めさせていただきました。

今回、第1地区の推進委員会ということで、事務局のほうからいただきました、この検討依頼事項にあるような内容を、この第1地区で進めていくという委員会です。皆さん大変お忙しい中ですが、今日は4名ご欠席ということなので、できるだけ多くの方にご出席いただきながら、皆さんのお知恵を拝借しながら進めていきたいと思います。また、私も大学の立場でお伝えすることがあれば意見を述べていきたいと思いますので、司会進行のほうも含めて皆さんのご協力をよろしくお願いいたします。

この推進委員会の要綱の中に、副委員長を委員長が指名をするということがございますので、私のほうから副委員長さんをお願いしたいと思いますが、副委員長さんには名簿の上より地域関係者の所の4番目にございます、森野さんをお願いしたいと思いますが、森野さん、よろしくお願いします。

（森野委員）

委員の皆さんの顔を拝見しますと、もう私では、というような感じがするんですよ。せっかくのお願いでありますけれども、どなたかほかに。過去には、あれでしょうか、検討委員会等でご経歴のある方はいらっしゃいませんか。

（中村委員長）

自治体の教育関係のほうからということをお願いしたいと思いますが、皆さん、ご賛同いただければ。

【拍手】

（森野副委員長）

いやいや、それはどうも。

（中村委員長）

一言、お願いします。

（森野副委員長）

私は上水内のほうの委員を仰せつかっているわけでありまして、その中で飯綱行政という牟礼、三水の組合立でございますけれども、そちらのほうの委員長と、牟礼の麓原の副やらせていただいているわけです。そんなことで、経験も少ないわけでありまして、なるべく皆さんのお力をいただきまして、それでまた委員長さんの補佐をできるだけ力を尽くしまして、この任を全うしたいと、そんなふうに考えておりますので、何分のご協力のほどをよろしくお願いいたします。

（中村委員長）

はい、ありがとうございます。

それでは、お手元にある次第に従いまして、会議を進めていきたいと思います。まず、本日、事務局から準備していただきました資料について、ご説明を事務局からお願いいたします。

（三澤教育支援主事）

資料の説明に入る前ではございますが、委員長にお諮りいたしたい件がございます。

当推進委員会は、原則的にすべて公開で行いたいと思います。つきましては、まずこの会議を公開させていただくことについて、さらに内容につきましても、議事録として公開していきたいと考えております。この件につきまして、委員の皆さまにお諮りいただければと思います。

(中村委員長)

事務局からご提案で、この会を公開で行いたい、それと内容につきましては議事録に記載して公開していきたいというご提案ですが、いかがいたしましょうか。

(全員)

異議なし。

(中村委員長)

それでは、ご異議なしということですので、公開で進めていきたいと思います。

## 5 資料説明

(三澤教育支援主事)

ありがとうございました。では、この件につきまして、委員の皆さまのご賛同をいただきましたので、そのようお願いいたします。

あらためまして、では事務局から資料の説明をさせていただきます。

お手元に、こちらの会場での資料ということで、資料番号7番から11番までございます。それともう1つ、学校要覧をファイルに綴じさせてさせていただいております。第1通学区、北信地区の学校の概要をまとめたもので出しております。それを全校分とじさせていただきます。

それでは資料7からご覧ください。資料7につきましては「高等学校改革プラン推進委員会の検討依頼事項について」でございます。この資料につきましては、5月13日教育委員会定例会において出されたものと同一のものでございます。内容的には「区別中学校卒業生数及び推定募集学級数の推移」と「基準に基づく各通学区ごとの学校数」ということであります。

表の見方ではありますが、縦に「区分」となっておりますが、第1区から第12区までございます。上から4番目までの第1区から第4区が、第1通学区に該当いたします。この第1区、第2区というのは、旧通学区でもあります。平成2年を100%としまして、どのくらい中学校卒業生数が減少するかということから、その中学校卒業生数の人数から各区間の移動、現在、通学区がまたがって入学しているわけですが、そういうものですか、あるいは私立高校への進学等も加味いたしまして、募集学級を計算しております。その一覧であります。「募集学級数」というところに区別にずっと31年までございます。31年は、昨年度(平成16年度)の時点で、満1歳になるお子さんが高校に入学するときであります。

それに基づきまして、先ほどの最終報告にもございました学校総数の設定基準と同様な手法を用いまして、右の端の欄であります、「現状の校数」、現在の第1通学区には27校ございます。「(1)」は、市立皐月高校を外数として示し、「基準に基づく各通学区ごとの学校数」の欄は、計算結果として21校となっております。市立皐月高校は(1)とお示ししてございます。それから「多部制・単位制」高校が1校、先ほど話がありましたとおり、多部制・単位制高校については、現在の全日制高校を転換して多部制・単位制高校を設置するということになります。

資料8をご覧ください。「県立高等学校の配置図」という資料であります。8角形の番号

で1というのがございますが、これが第1通学区、北信地区となります。このような市町村の状況の中に、先ほどの27校の県立高校がございます。長野県の地図の中で高校の配置を、「・」で表現させていただきました。細かく四角い数字で1～4までが、旧通学区、先ほど見ていただいた資料の第1区、第2区、第3区、第4区を示しております。

資料9をご覧ください。「平成16年度高等学校別入学者の状況」で、第1通学区から第4通学区までを別の用紙にしております。第1通学区については1枚目になりますが、ちょっと見方をご確認いただきたいと思います。

旧第1区、旧第2区、旧第3区、旧第4区となっておりますが、これは最初の資料の7ですと、第1区、第2区、第3区、第4区に該当いたします。旧第1区に該当する高校といたしまして4校、飯山照丘高校、飯山北高校、飯山南高校、下高井農林高校がございます。次の欄に、それぞれの高校が所在する市町村を掲げております。

「募集定員」の欄は、平成16年度時点で何名の募集であったか、上から80、120、120、80とあります。その中から「市町村の出身者」ということで、飯山市内の出身者がそれぞれ29、60、63、12となっております。それと「市・郡出身者」につきまして、これは飯山市の場合は市内ですのでまったく同じ数字になっているかと思いますが、町村の場合ですと、高校の所在する郡下から何名かという形で出しております。

またeの欄でございますが、「旧通学区出身者」は第1区、第2区というくくりの中で、何名が、それぞれの高校に入学しているかという数字であります。

それと「地元市町村生徒数」であります。これはそれぞれ市町村単位というところで、何名の中学生が卒業したかということでもあります。

それを元にしまして、右側のほうですが、「定員充足率」は募集定員に対する入学者数の割合でございます。「市町村出身比率」は式が書いてございますが、入学した生徒のうちで所在する市町村の出身がどのくらいいるかという割合であります。「市・郡出身比率」も同様に入学した生徒のうちで市・郡出身の方がどのくらいいたかになります。「旧通学区出身比率」も入学者のうちで旧通学区内から入学している生徒さんがどのくらいの割合であるかということでもあります。「地元生徒比率」につきましては、先ほどの飯山市では、274に対しまして、市町村出身者がどのくらいいるかということで、地元からどのくらい入っているかという数字を目安として表したものでございます。

続きまして資料10をお願いいたします。「平成16年度、平成17年度、入学者選抜に係る募集定員、志願者数、入学者数の状況」であります。左半分は平成16年度の募集定員、それと前期選抜、後期選抜の状況になっております。前期選抜での定員と志願者数による倍率、前期選抜によって一応入学の意向を示してくれた生徒（確約者）が何名であったかという順でございます。それと、後期選抜のほうでも同様に、定員、志願者、倍率、それと合格者という順に記載させていただいております。

「入学者数」は、通学区別にページが分かれておりますが、この資料の4ページ目の第4通学区の下のところの注意書きがございます。入学者数は、単純に前期選抜の確約者と後期選抜の合格者をプラスしたものでなくて、後期選抜以降、再募集等も行っている学校がありますので、それも合計いたしまして、入学者数となっております。

「充足率」の欄は、募集定員に対しまして入学者がどのくらいの割合でいるだろうかという比率であります。16年度、17年度につきまして同じような体裁でお示しさせていただきます。

いております。それと、各学科別に記載させていただいておりますが、ご注意いただきたいのは、下高井農林、須坂園芸、更級農業であります。くり募集という形で学科枠を取り払った形の募集をしております。表記上、各学科をまたがった形で募集定員等を記載してございます。

資料 11 をご覧ください。「平成 17 年度、旧通学区別入学者流出入表（全日制）対 16 年度比較」でございますが、表が 3 つほどあります。表の見方をご説明申し上げたいと思います。「全体」のところをご覧くださいと思います。

「平成 17 年度流出入表」の横軸に「From 中学校の所属通学区」と書かれているかと思っております。旧通学区の番号で 1 区から 12 区まで、県外、流入数という欄があります。縦には「To 高校の旧通学区」となっております。これも 1 から 12 までの数字で書いておりますが、1 区、2 区、3 区など、同じ旧通学区の番号を示しております。

見方としましては、例えば 3 区のところをご覧くださいと思います。「中学校の所属通学区」、横のほうの 3 区であります。上から数字が順番に「23、324、1363、262」というように続いております。これは 3 区にちょうど所属します中学校の生徒さんが高校入学時に旧第 1 通学区に 23 名が行っている、旧第 2 通学区に 324 名が入っているということです。同じ旧第 3 通学区内には 1,363 人が進学されているというように見ていただければと思います。

これを横に見ることもできるわけですが、同様に 3 のところを横に今度は見ていただきますと、「58、139、1363、372」というように数字が並んでいるかと思っております。これは 3 区にある高校に入学した生徒は、1 区の中学校から 58 名が入学している、2 区の中学校から 139 名が入学してきている、同じ 3 区内の中学校から 1,363 名が入学してきているとご覧いただければと思います。

一番右側の列に「流入数」がございます。これはちょうど今、3 区のところでご説明いたしましたので、同じように 3 区のところの説明いたしますが、623 という数字になっております。この 623 という数字につきましては、3 区に書かれている横 1 行の中から、3 区以外の出身者の合計になります。1 区から県外までの数字を全部足しまして、3 区に書いた 1363 を引いたものということです。

それと下のほうですが、「流出数」という欄がございます。これにつきましては、例えば、1 区の中学校を出られて、高校へどのように行ったかということで、例えば 1 区ですと、336 名、68 名、58 名となっておりますが、同じ 1 区内から 336 名、第 2 区以降の 68 名、58 名、2 名、3 名、1 名を足したものを流出数として出しております。同じ旧通学区内の高校へ行っていない数ということになります。

さらに「流出数」、その下に「流入数」がまたございますが、これは先ほど見ていただいた「流入数」を横向きにしてあるものです。流入から流出を引きますと、- 62、228、- 8 となるということになります。

同じようにしまして、真ん中にありますのが、昨年度（平成 16 年度）の状況です。平成 16 年度の状況を同じような形で表してございます。

一番下の表につきましては、平成 17 年度から平成 16 年度の同じところをそれぞれ引き算して出したものであります。どのくらいの差があるかという、17 年度と 16 年度の差がどのくらいあるだろうかということで出させていただいた数字です。

もう1つの資料といたしまして、学校要覧をご用意いたしました。先月時点で各学校からいただいたものであります。部数がそろわなかったりする学校もありまして、コピーを取って中に入っているものもあります。まだ17年度の学校要覧ができていない学校もありますので、平成17年度のものができ次第、差し替えていただきたいと思います。資料の説明については、以上であります。

## 6 議事

(中村委員長)

ありがとうございました。

それでは、先ほど吉江課長から全体会のときにご説明があった資料と、それからただいま説明いただきました資料の内容等につきまして、ご質問等がありましたらお願いしたいと思います。

なかなか数字が細かいので、見方等でも疑問のある点がありましたら、よろしくお願いします。大変、基礎になる資料と思います。

(小山(壽)委員)

資料9について、もう一度教えていただきたいのですが、資料9の中で「市町村出身者c」「市・郡出身者d」の数字、それから「地元市町村生徒数f」という数字について、どのようにして算定されているのか、もう少し説明していただきたいのですが。

(三澤教育支援主事)

資料9であります。下高井農林高校のところをちょっとご覧いただければと思いますが、募集定員80、入学者数80というところです。「市町村出身者」というのは、この場合には木島平村から入った生徒さんが12名ということになります。「市・郡の出身者」というのは、この場合ですと下高井郡から入学した生徒が25名であります。この25名の中には、前の市町村出身者の数も含まれております。それと「地元市町村生徒数」というのは、木島平村から52名が県立高校に入学しているという数字であります。よろしいでしょうか。

(小山(壽)委員)

そうしますと、例えば、fの数字を第1通学区について説明をしてもらったわけですが、飯山市の3校が274名ですね。それから下高井農林の人数と交差していることがあり得るということですね。

(青木委員)

いただいた参考の資料は、この後の検討をする際に大事な基礎資料になりますので、ちょっと確かめておきたいことですが、資料6は、全体会議でいただいた資料でありますけれども、今の説明の中で、平成2年の対比でもって百分率で書いてありますね。これは資料7にも通じる話ですが、平成3年で100として31年までのことが書いてありますね。でも、全体のワーキンググループを立ち上げて開始したのが、平成15年からですね。そして、現実については平成2年ではありますけれども、その間、ワーキングチームを立ち上げる



までの間の13年間、ここでよいとは思わないまでも、確実に生徒数が減るという現象を横目で見ながら検討していなかったわけだから、これは平成31年の比較の中で、平成2年との比較ではなくて、平成15年と比較を出すほうが妥当ではないかと思うことが、まず1点です。

それから、当然、平成31年というのが、いま現在、この17年度に誕生する子が高校へ行く年度ですね。ということは、これももう確実に平成16年まではもう、要は自然増というか、誕生数に関してはもう正確な数字は把握できますね。あとは社会増で流入してくる方を除けば、誕生で数は把握できるわけですから、私はいわゆるシミュレーションという言葉を使うのであれば、数字的にそろばんをはじけば出る数字だけではなく、平成32年以降どうなるかということもある程度入れておかなければ、さっき課長さんでしたか、次長さんでしたか、今後10年間を見て、10年後には再度また検討する必要があるということが出たと思うのですよ。だから、あまりにも将来性のない、わずかな時間での検討としか聞こえなかったけれども、やはり32年以降のこともある程度視野に入れた議論が今は必要だと思うのです。

少子化問題というのは国を挙げての社会問題ですから、このままがいいなどとはだれも思っていない。そうすると、国がやる少子化対策、県がやる少子化対策、市町村がやる少子化対策というのがありますが、これからそれがほとんど少子化対策の効果がないというような資料なんて寂しいではないですか。

必ずその効果が、平成32年以降に出るということも前提の、ある程度その数字を盛り込まなければ、適正な学校数ですか、そういうものは出てこないと思うのです。

ですから、用意してくれた資料にはその辺の不備があるので、それをもうちょっと親切な資料がないと検討ができないような気がいたしますが、いかがでしょうか。

（中村委員長）

今、2点いただきましたが、まず平成2年でなく、平成15年ということをお答えいただきたいと思います。

（三澤教育支援主事）

昨年度、高校改革プラン懇話会でも、16年度比という資料を用意させていただいた経過もございます。資料7の割合の部分で、計算しなおした資料も必要であれば、ご用意させていただければと思います。

（中村委員長）

もう1点は、シミュレーションの予測のところ。

（三澤教育支援主事）

32年以降であります。最終報告書の15ページであります。「長期化する少子化」という、15ページの一番上のところにグラフが2つ載っております。その部分に「全国人口動態」と「長野県人口動態」ということで、推計値ではありますが、国立社会保障・人口問題研究所の都道府県の将来推計人口というものがございまして、ここから長野県の人口動

態につきましては、見ていただきますと、折れ線グラフの一番下にあるかと思います。年少人口という14歳までの人数になりますが、長野県全体の人口動態が出ております。傾向的には、少子化の現象というのは2030年でも継続していくということであります。

この辺も、ご議論いただく中で、さらに先ほど人数の推計が必要である場合は、またご検討させていただきたいと思います。

（中村委員長）

平成16年度基準の資料は懇話会でも検討されていますので、またご準備いただけるということで、よろしいでしょうか。

（三澤教育支援主事）

検討させていただきたいと思っております。

（吉江高校教育課長）

今、中野市長さんからお話がありました、人口推計の関係でございますけれども、これは15ページの今の表もあるのですが、実はご案内のように、いわゆる国のほう、日本の国のピークは平成18年（2006年）といわれておりまして、例えば、その20年後、私どものほうの推計は今は39年までをベースにつくっておりますが、推計というか、実数に基づいて推計という形になりますけれども、それが仮に国のほうの数字だけを求めまして、20年後の平成31年と見比べますと、例えばの話が、平成18年を国ベースで100として見た場合に、0歳から14歳が20年後には78.88%なのです。さらに申し上げますと、15歳から64歳が85.62%になってしまいまして、それで65歳以上人口は132.54%になるということで、現実的には今回ご覧いただいた推計のような数字と、数字をどんどん下がるような数字になってこようかと思います。

確かに、ただ私どもは推計値というものを使いませんでした、ある意味でそういうような数字を使えば使うほど、ご案内のように推計値の難しさはございます。そのようにして、それ以外に、その推計値を使えば使うほど、実はどんどん学校数の理論数というのは厳しい数字が出てこようかと思います。

そういう意味から、とりあえず、私どものほうとしましては、現時点において出生された方々の数に基づいて予想されるところ、いわゆる実数においてかなりの精度の高いと数字で今回はご議論いただこうということの中で、31年まで記載させていただいたという数字でございます。

間もなく32年の推計数値の確定を待って、いつごろになりますかね、とりあえず、あと数カ月後にはお示しできるかと思っております。そんな状況でございまして、その辺も含めてご検討いただければと思います。

（牧 委員）

教えていただきたいのですが、これは学校の実際の校長先生や、あるいは教育委員会で把握されているかどうかですけれども、資料9、10、11といただいておりますが、これが高等学校の実際の実態数字を出されていると思います。けれども、この結果の数字ではなく

て、子どもたちの本当に行きたい学校というのはあったと思うのです。

我々の時代もそうでしたけれども、やはり今日、子どもたちの要求・要望というか、学校を選ぶ基準というか、須坂もそうですけれども、やはり長野市内の高校に行きたいというのが結構多いですね。

我々の子どもの時代も、今、保護者から聞きますと、そういう実態があって、特に第1通学区、第2通学区等を含めると、やはり長野の学校へ行きたいというような実態があると思いますが、実際に募集人員と、子どもたちが希望する学校の生徒の数字が、第1募集等に突き当たると、集中していく部分というのがあるのですね。

普通高校あるいは専門、実業高校ですか。そういう状況になると、比較的、次の段階における志望校、あるいは進路指導の先生方によって、ある程度本人の希望どおりにいかない部分があって、多少なりと調整されるといいますか、それは子どもの保護者を入れて調整する形だと思いますけれども、そういう段階を迎えて最終的に応募して受験をして結果が出て、その学校に行くというのが、私は実態ではないかなと思っています。

そういう数字の裏付けであれば、あまり今回の通学区の、通学区といいますか、その地域のこういう実態数字を見る中で、どれほどの参考にしたい資料かなというような部分があります。その辺はどのように考えればよろしいですかね。

実態をお分かりになっている、飯山北高の校長先生など、その辺のところのお話と、あと教育委員会のお話をちょっといただけませんか。

(小山(壽)委員)

高校のほうは受入側でありますので、そういう意味で言いますと、今、おっしゃられた、それまでの経過というのは、話に聞いていたり、あるいは私自身が自分の子どもが進学をしていった時期がありますので、そういうときでの関係ということになりますが、当然高等学校には募集定員がありますので、募集定員との関係の中で、さまざまな子どもたちの思いがぶつかっていくということはあるだろうと思っています。

今、飯山北高校の校長として言うならば、地域の子どもたちは一定規模の地域の学校で育てるべきではないかな、また、かといって具体的に高校をどうするかという話をするともなかなか難しいが、そういうことをしていくのが望ましいのではないかなと思っています。

(中村委員長)

牧委員は、子どもの希望を、何とか数値として表わせないかというようなことでしょうか。

(牧 委員)

この数字というのは、調整ということもないけれども、実態は本当の意味での高等学校に行きたい子どもが行っている数字ではないのではないかな。ですから端的に言うと、須坂に4校ありますけれども、本当に農業学校で勉強したい生徒なのか、商業学校で勉強したい生徒なのかということです。

私どもの企業にも、園芸を習った生徒、農業経済とかを学んだ生徒が実際に入ってきて

す。私どもの会社の事情で言いますと、工場の機械のオペレーションをやっているわけですから、私どもが望んでいるのは、高校生であっても、やはり工業系の機械とか電気の出身者の子どもたちを企業しては受け入れたいし、また地元で採用したいという願いがありますけれども、実態としてはそういう場合がたくさんあるわけです。

そうすると、例えば、何々高校は志願倍率が1.5倍であるとする、とてもその学校は無理だ、だから須坂の別の高校なんだと、というような実態があると思うのですね。

そうすると、こういう詳しい資料そのものが、これからの委員会の中で議していく中で、この数字を生かせるものになるかどうかということに対して、ちょっと私も疑問がありますので、そういう意見をいろいろな角度から聞きたかったのです。

（丸山委員）

今の問題はすごくいろいろな重要な問題だと思うのです。多分、県のほうもその資料は持っていると思うので、出せるのなら出してほしい。中学校の段階で志望を取る、多分12月のころに第1回の希望調査というのがあるのですね。それが昔はよく新聞に発表されたけれども、今は発表されない。それからだんだんと変わっていく、穴が埋まっていくといいますが、集中するのが平均化されていくという動きがあるので、それはなかなか厳しい資料なのだろうけれども、出せるものなら、その分でもきちんと検証する必要がある。

特に私が思うのは、生徒数は入学者の数になっているので、少なくとも募集の数を入れてほしいというのがある。大抵はそれで少しは分かるのですが、本当はもっと第1回の調査ぐらいのところが、一番、生の状況だと思うので、そういうのがあればいいと思うし、それがいわゆる特に学区が拡大されてから、特にこの地域は交差通学がすごいことがわかる。

例えば、うちの学校などでも、ものすごく遠くから来ているわけです。それがいいのかという問題もあるわけです。だから、近くの学校に行けないで、遠くに行かざるを得ないということなのですが、この検討委員会の報告では、通学範囲ということが盛んにいわれていますけれども、本当に通学にきつい高校生というのは結構いるわけです。やはりそういう状況の資料も、ぜひ出せるものなら教育委員会に出してもらいたいというのがあるのです。

だから、まず最初の希望の調査の問題のものと、それが無理だとしたら、最低、希望した数、志願した数、これは入学した数だから合格した数ですよね。志願した数、例えば、落ちた数もそこには入っているものがよいわけです。

（牧 委員）

今、丸山さんがおっしゃったように、私も聞きたかったのはそこなのです。スタートのときにどういう志願をしたかということが大事なかなと思ったのです。そういった調査の結果、これを見て、どうあるべきかということのほうが大ornaかなと思ったのです。そのデータを見て検討し、何かやることがよいかなと感じたのです。

(中村委員長)

牧委員のおっしゃっている子どもの気持ちですね。それをデータとして反映するのは非常に大切なことだと私も思います。ただ、第1回の調査が果たして、より近いとは思いますが、子どもの気持ちかというと、たぶん親の指導がかなり入っている傾向があります。中学校の進路指導は相当しっかりされていると思いますので、その辺が本当に本人の希望がすべてデータとして出せるかという点は、ちょっと難しいのではないかなと私は思います。そのデータが出たからといって、それが本当に子どもの気持ちかというと、また難しい面があると思います。第1回の調査のデータというのは、それは提出できるものなのでしょうか。

(三澤教育支援主事)

第1回の調査という数字は確かにありますけれども、どんな形でお示しすればいいかということで、ご検討させていただければと思います。

それから、前期選抜、後期選抜となりましてから、前期選抜にはかなり自分の希望する進学先を受検しているかと思っています。そういう意味では、以前に比べますと、その入試の情報自体も、かなり生徒の進路希望が反映されているのではないかと思います。その過程の中では恐らく中学の担任の先生等との懇談がございましたり、親との相談があったり、あとは高校の体験学習ですとか、いろいろな形で、進路を自分で決めながらいく部分もありますので、一概に希望調査時点のものが一番いいかどうかということはちょっと分かりかねる部分もあります。何らかの形で今、お伺いしたようなことで資料を用意できるかどうか検討させていただきたいと思います。

(森野副委員長)

今の話でまったく、牧さんのお話を伺っていて、賛成なのです。やはり「十五の春」になってしまう。それが前提なのです。そこで今は泣いているのです。

それで、中学の校長先生もいらっしゃいますので、学校の実情も分かるかと思いますがけれども、変な言葉で悪いけれども、普・商・工・農というような、まさにランク付け、中学校などでは、これを前提にしてしまうと思うのです。ボーダーラインなどがあって。それで、あのいい高校へ行きたいと言うと、まあ待てよとなり、だんだん、だんだんランクを落とされてしまう。それで、言葉は悪いが、そういったランク付けがありまして、中学では多分、各高校でその進路指導の先生方がデータを持ち寄って、「お宅の学校はこの程度で、どこへやってるね」と、よくご相談されているかと思うのです。だから、確かに今の子どもは気の毒だと思いますよ。

それと同時に、辺地校です。やはり辺りな学校といいますが、上水内の場合は、やはり長野へ出るにしても、バスで何万円もかかってしまうわけです。ですから、地元で高校があれば、そこへ行くことができるのだけれども、それでもやはり今、牧さんがおっしゃったように、長野へ出たい。親の欲目もありますよね。

そんなことで、やはり何としても調整が難しいと思うのです。親の意見、子どもの願い、それから教師の願いというものでね。こちら辺りはやはり中学校の進路指導をちょっとお聞きしたいと思いますけれども、いかがなものですか。

(坂口委員)

森野先生のほうからお話がありましたように、進路指導の難しい部分がございます。結局、先ほど松澤教育次長が言われた、子どもは行きたいと思える学校へ行きたい、親は行かせたいと思える学校へと、親と子どもの葛藤というのは、特に12月、1月あたりは非常に大変なものがあるかと思います。何もなくて行く子どももいますし、本当に先ほど「十五の春を泣かすな」というのですが、すべてがそれに対応していいかどうか分かりません。やはり壁にぶつけて、それを乗り越える、そういうたくましい日本人にしていかなければいけないという責務を我々は持っているかと思います。

しかし現実には、できることなら3年生が卒業式を終わって、全員が自分の希望する学校に入って、夢と希望を持って4月をやはりスタートしてもらいたいという思いは全部の教師が持っております。しかし、先ほども調整という言葉でございましたけれども、現実の問題は定員が決まっており、そしてその本人の力等々をかんがみたときに、本当にそこで「よし、やってみるか」ということをすべての子どもに後押しできるかどうかは、本当に難しいと思います。ですから、調整ということは非常に悪いわけでありませけれども、親と本人と、本当に腹を割って、教師は苦悩しながら、その子の将来を考える、そういうのが現実であります。

先ほど事務局のほうからございましたが、前期・後期の試験が入ってきましたので、これもこれでいろいろ中学校側とすれば課題であり、改善も毎年お願いしておるわけですが、募集の観点によって、自分の個性を磨くためにこの学校に行きたいのだと、結果は別として、そういう1つの選択肢は非常に広がってきたということで評価できるかなと思います。ただ、実際的には非常に多くの不合格者が出ておりますので、子どもにとってみれば、そのアフターケア等々、非常に難しいものがあります。

ですから、本当に行きたい学校へ行けるのがベストなわけですが、当然、間口は狭いわけですので、中学校側とすれば、進路指導というのは子どもとの日常の指導の中で、少しでも選択肢が広がるようなキャリア教育とか、あるいは進路指導を進めていきたいと思ってやっております。

学力テストがあり、調査書があり、クリアするにはいろいろな課題がありますので、中学校も本当に幅広い立場で、1人の子どもに精いっぱい対応しているということでもあります。

あまりどろどろしたところはお話しできない部分もございますが、非常に苦慮しているというのが現実であります。

(中村委員長)

今後の委員会で高校の魅力づくり、あるいは希望との関連でまだご議論いただくとは思いますが、大切なところのお話をありがとうございました。

(若麻績委員)

最初なので、ちょっと教えていただきたい気持ちも込めてご質問するのでございますが、今のお話を伺って、ついこの間、うちの娘が初めての希望を出したというようなことであつたわけですが、まだ中学生で書けない話だというのが現実ということもありまして、今、

第1回目の希望が始まったときで、やはり数字的には非常に興味のある部分でございます。その部分で最終報告書の「はじめに」のところにもあるのですが、この文章を見ますと、よく目にするのは子どもの多様化という部分が多いのです。

多様化というのは、私も自分のうちの子どもを見ていて、ほかのお子さまとなかなか比較するということができないわけですが、どういう観点から多様化している生徒ととらえたらいいのか。さまざまな側面があると思いますけれども、現在、やはり子どもさんの数というのはかなり目減りしている中で、当然、考えていかなければならないと思います。

ここへきて、この会議を立ち上げて、これをテーマにしていく以上、魅力ある高校をつくるための一番の基であるその多様化というのが、どういう観点なのか、その辺をちょっと教えていただきたいと思います。

（中村委員長）

これはぜひ皆さんにご議論いただいていくほうがよろしいことですが、検討委員会の様子では、まず学力の問題と、子どもたちの希望の多様化というものを考えていたと思いますが、それでよろしいでしょうか。

（小山（壽）委員）

今、中村委員長さんのほうから懇話会の経過等を言っておられますけれども、生徒の多様化ということは、生徒の将来どうしたいかという希望の多様化、また中学校段階からずでに出ている、不登校生徒というような、いろいろな生徒がいらっしゃる中で、受け皿としての高校もいろいろな選択肢を用意しなければいけないというような状況だと思います。

全日制におきましても、また定時制におきましても多様化している。例えば定時制では、不登校経験の方が多くて、普通科がある学校に行って進学するというような、ひとつの進路実現を課題としているだけではない状況がある。そのような意味合いにおいて、多様化をしていると、このようなことを含めて、そのような考え方ができるかなとっております。

（中村委員長）

ありがとうございました。

この最終報告書の10ページ辺りが「多様化のために」という項目がありまして、いろいろな高校が想定されている、コースが想定されている、検討委員会のほうでは、いろいろな案をお示しいただいています。

どうでしょうね、これをこの推進委員会の議論で、どのような高校にしていくかというようなことも、今後の学校別の特徴に応じて検討していかなければいけない、そういうことだと思います。

多様化に関しては、坂口委員、いかがでしょうか。そういう意味合いがあるということでは。

(坂口委員)

分かります。子どもの多様化というのは、生徒の考え方の多様化ということでとらえるのですが、もちろんそれに対する親の考え方の多様化も当然そのほかにはあるということだと思います。その辺の踏まえ方ということが1つあります。

それからまた、先ほどもご質問があったのですが、もちろん子どもや親からのニーズというものに対してこたえるということは、その面では大切なことだろうと思います。その反面、やはり誇りある信州教育として、どういうものを理想として、考えておられるのか。それは誰が考えるということではなくて、そういう意識を共に信州人として持っておられると思いますが、そういうことがやはり大切な道理だと思っております。以上です。

(中村委員長)

はい、今のように、論議の中にはそういう観点も含めていきたいということによろしいでしょうか。

(小山(元)委員)

多様化にも関連した、地域高校との関連も、学校数というのは、先ほど少し申しましたように、数字が出されたものですから、非常に世間ではいろいろに取りざたされているわけですが。ただ数字を出されたのはいいですが、これはある意味で、基準的にはじき出した、生徒数からはじき出された数字でありまして、それをどのように考えていくかというのが、今度検討する委員会だと思いますけれどもね。

先ほど牧さんのほうからも出されたのに関連しますが、地域の高校というのはやはり歴史を見ていけば、それなりにその地域で大事に考えられて設置してきた経過があるわけですね。そして私たちにすれば、やはり通学区が12から今は4になって広くなりましたけれども、できるだけやはり地域の子どもは地域の高校へ行ってもらいたい。そこでやはり勉強して、地域をさらに活性化してほしいのだという願いというのが一番なのです。それが地域の中学の進路指導、進学指導では先生方も実際にご苦労されて、ご指導になっているわけです。

そういう関係もありますので、やはり数字だけが独り歩きしないような、大事に考えていく方向というのをやっていかないと、本来みんなで考えていかなければいけない、地域の方々がどういうことを考えているか、そういう狙いも大事に出していく、そういうところから外れてはいけないと思うので、その数字を出されたのは分かりますけれども、その点について、今後の見方、方向というのはどのようにお考えになっているか、事務局にまずお尋ねしたい。

(米澤教育次長)

教育次長の米澤と申します。

報告書の、例えば15ページをちょっとご覧いただきますと、いわゆる地域高校等の協議で検討されましたので、もう一度見させていただきたいと思うのですが、15ページの真ん中辺りにございます「地勢や地理的条件に配慮する」というところで報告されております。「地勢や地理的条件に配慮する。しかし、その際大切になるのは、長野県の地勢や高校



配置の地理的側面への十分な配慮である。本県は広大な県域を有する上、山間部が県域全体の中の約 80%に達するという特性がある。高校の配置を考える際には、地勢、学校の立地環境、近接校との距離等のきめ細かい検討が不可欠になる」ということで、これは懇話会の中でも出されたものが、このような文言として報告書に反映されているというふうに、私どもは理解しているわけでございます。

各通学区にあるいわゆる地域高校にはそれぞれの歴史、特性がありますので。それぞれ歴史があることは十分承知の上でございますが、しかし、近接校との距離、子どもたちが通える、通えないということも考慮しなければいけないということは、報告書にうたっていただいておりますので、あとはそれぞれ各推進委員会の中でご討議をいただく、ご審議をいただくという考え方でございます。

76 を出していただいたことにつきましては、冒頭高校教育課長からも説明させていただきましたが、平成 17 年から 31 年までの募集学級数の平均をとりまして、この 5.5 という平均学級数で割りますと 76 という学校数が出るわけで同様に旧第 1、2、3、4 区をそれぞれその式で出してみますと、ご覧いただいたような数字になるということでもあります。その点については、このところ各地域におきましてご心配いただいておりますが、この推進委員会でご審議いただくための目安として出させていただいたものですから、その数字を目安に委員の皆さまの叡智を集めていただいて、決めていただければというふうに存じます。

（小山（元）委員）

関連でいいですか。

地域校を、私は見させていただきたいということです。ですから資料 4 で出ておりますね。この資料 4、今日は検討委員会なのか推進委員会なのか、もう既にこの通学区においては 6 校減ということで話を進めていくわけなのでしょう。そういうことなのですかね。

「いや、困るんだよ。地域の皆さんのご意見はこうだよ」としたときに、この 6 校減でなくて、少し緩和できないものかというようなことにはならないのでしょうか。

（米澤教育次長）

小山委員さんの今のご質問でございますけれども、繰り返しになるかもしれませんが、一応、先ほどの考え方で、一定の審議を進めてもらうための 1 つのたたき台として出させてもらったわけですので、その数字について、もちろん一定の重みを持ってご審議いただきますが、今、小山委員さんから数カ月のご審議の中で、いろいろやって個々の事情があるから、ここはこうではないかというようなことが、万が一出るということも、それはあり得ることかもしれません。そのような想定ではありますが、今から、いや、そんなことはもういいですよというわけにもまいりませんので、一定の重みはある、というふうに受け取っていただく中でご審議をいただければと存じます。

（小山（元）委員）

ああ、動きはありますよと、こういう許容範囲は持ちますよということですね。期待が持てるわけですよ。

(米澤教育次長)

今、その結論を言うというよりは、私はご審議を進めていただくほうを先にやっていたくということで考えております。

(丸山委員)

今の件で言えば、私もぜひそのように、もちろん数字が出てしまったから、とらわれるなといっても、与えられた数字が頭の中にあるわけで、それはあるのはいいけれども、やはりあまりそれにとらわれずに、この地域の現状をしっかりと検討してやっていくというのは、これ、この報告書自体がすごく数字の問題については、すごい矛盾をしているのです。

2学級で残してもいいというのが一方にあるわけです。地域高校とか、条件のいろいろある学校は、2学級を残すという基準がありながら、そうすると、それを残すことになったら、6というのが独り歩きしてしまったら、ほかで6を減らさなければいけないというような、そういうことが大きな矛盾になるわけです。

だから、そういう点では、相いれないようなものが2つ入っているわけです。そういう点でいけば、やはり地域ごとにきちっと検討して、もちろん6ではないことも十分あり得ると、当然、話が出たけれども、実はこの地域はこうなんだよという、我々の中では十分こういうことは、これからぜひいろいろな地域の状況を出しながら検討していったほうがいいのではないかと思いますけれども。

(中村委員長)

はい、ありがとうございます。資料4に示されているような検討事項を総合的に考えて、数字は目安としてとらえていくということがありますので。

(森野副委員長)

そういうことになると、ありがたい。先ほども小山さんがお話しされたけれども、やはり地域ではいろいろな歴史があって、それでみんな、今出た税金でしょうか、あるいは土地を提供した人がいるわけですよ。そうした人の思いというものが、これで殺されてしまうわけです。それは数の上で地域高校は外していくよということになりますと、地域の発展もなくなる。

そのような意味で、今のおっしゃいました米澤次長のお考えを、私は大事にしたいなと、そんなふうに思います。

(中村委員長)

推進委員会の進め方についても議論いただくと同時に、今日は資料の説明をまず済ませておきたいと思います。後ほどまた、どんな項目で進めていきたいか、次回は何をしたいかというところをご検討いただきたいと思います。ほかに資料について、お願いいたします。

( 塚田委員 )

今日はたくさん数字が入った資料をいただいたのですが、このように表で数字でよく見ないと分からないようなところもあるのですが、逆に言うと、この資料6は非常によくできていると思います。ですから、こういった数字が入った表も何か視覚に訴えられるような工夫ができれば、お願いしたい。

記録を取っておられる方は、そういうようなことはできますよね。だから目を見て、あ、そうなのかって分かるという、先ほど青木さんが言った、時系列でどうなっていくかという、そういうことも目で見られれば非常に分かりやすいので、今後の資料も、もしそのようなこともできれば、お願いしたいということです。

( 三澤教育支援主事 )

ありがとうございました。心掛けたいと思います。

( 坂口委員 )

それでは、お願い自体は、この資料にかかわってですが。この16ページの一番下のところに、「高校システムの全体規模という視点」からの【生徒数の現象と立ち後れた対応】ということで、触れられています。しかし長野県ではその対応がなされてこなかったということで終わっていて、今までずっと高校の改革について、若干後手後手の対応だったかなという文言があるのですが、全国の都道府県で実際に再編整備計画が出されている。

実は先週、全日中の全都道府県の校長たちの集まる会で、長野県ではこんな今動きがあるということで、高校改革についても触れたのですが、どこの県からもそれについて反応がなかったものですから、あれ、どういうことなのかと思って、ちょっと不思議に思ったのです。これを見ると、長野県以外はすべてもう動いているわけですね。具体的にどんなことなのか、やはりこういう数に当然かかわっての再編があるわけですが、長野県と似たような状況の、全部いただいても意味がないけれども、何か参考になるような、魅力づくりであるとか、あるいはこの数の面でも結構であります、何か資料があると、ありがたいかなという個人的な思いであります、いかがでしょうか。

( 中村委員長 )

全国の検討事項に関しては、懇話会でも事務局のほうで資料を用意していただいております。幾つかあると思いますので、また、分かりやすいものをお示しいただいて。

( 三澤教育支援主事 )

懇話会の資料もございますので、また一応検討させていただきまして、分かりやすい資料としてお示ししたいと思っております。

( 中村委員長 )

ほかにございますでしょうか。今のような、次回の検討に役立つような資料をお願いしたいというような関係でも構いませんが。

( 森野副委員長 )

その資料として、総合学科、これに興味があります。志学館のこれは、ここには入っていませんね。志学館に関する資料をいただけますか。

( 三澤教育支援主事 )

はい、分かりました。

( 中村委員長 )

総合学科の志学館。総合学科に対しての内容ということですね。

( 森野副委員長 )

そうそう、ええ、総合学科高校としての。

( 三澤教育支援主事 )

学校要覧でよろしいでしょうか。

( 森野副委員長 )

ええ、学校要覧。

( 三澤教育支援主事 )

はい、了解いたしました。

( 森野副委員長 )

次回で結構です。

( 中村委員長 )

ほかにご質問等、ありますでしょうか。

なければ、よろしいでしょうかね。今日は顔見せといいますが、いろいろ説明いただいて、次回以降の検討事項ということでお決めいただいて、概要を決めた上で進めたいと思いますが、日程については後ほどということで、次回のこの推進委員会でどのような検討をしていったらよろしいか、ご意見がありましたらお願いいたします。

( 青木委員 )

ちょっと聞かせてください。

10 ページ目にありました、先ほどの話ではないですが、柔軟化と多様化の中での「総合学科学校」、「多部制・単位制高校」等々、説明は先ほどいただきましたけれども、ちょっとまだイメージとしてわからないので、どこかの会合のときに、ここの部分に集中して、はっきりとイメージのわくような具体的な突っ込んだ説明をいただきたいということが、まず1点であります。

それから、今の志学館のはないまでも、いずれにしても、私どものこの第1通学区のと

ころの各学校の要覧を全部、今日いただいたわけですが、これをいただいたということは、限定した地域高校に限らず、すべてのこの管内の高校を、この委員会で1つ1つどういう個性があるのか、どういう特徴があるのか、今どういう方向に学校改革をしようとしているのかということを、分析する時間があるのかないのか、しようとしているのか、その辺をちょっとお聞かせ願いたいと思います。

（中村委員長）

6カ月ぐらいの間に、この資料4にある検討事項をご検討いただくことになりますので、個々の学校に関しましては皆さんにお読みいただき、それで課題に上ったところを、たぶんこの場で検討するというような形だと思います。1つ1つをやっていく時間はとてもないというふうに私は考えております。

（青木委員）

それにつけても、それぞれ、今日の委員の中にも、欠席者もいらっしゃいますが、少なくとも私どもの自分自身の住まいするところの学校は、ある程度どういう個性を持っているか、またこれからどういう方向を目指しているかというのは、分かると思うのですよ。

でも、これは1つ1つの学校にしてみると、それこそ生き死にの問題ですから。私どもが、自分の身近にない、でも近隣の学校を知るチャンスが、いただいた要覧だけではこれはどうやったってつかみ切れない。でも時間がないことも分かる。でも、どうやってその生き死にの問題を責任持って私どもが県教委のほうへ申し上げていくのか。無責任なことは言いたくないですし、どうしたらいいでしょう。その辺が私自身もちょっとジレンマです。

（中村委員長）

学校要覧では得られない情報というのは、そのご当地の方に教えていただくのが一番いいと思います。

（青木委員）

そういうのは場合によっては、あるときにその学校側からプレゼンテーションしてもらうなどという、そんな大胆なことを考えている時間というのは、とても無理なのか。

（中村委員長）

ちょっと、その辺は進め方ですので。

（青木委員）

各学校全部、言い分はありますね。

（中村委員長）

懇話会、検討委員会の中でも、各学校の特色ということでご発言いただいて、まあ全部ではないのですが、特色のあるところを教えていただきながら、あ、そういう例もあるの

かと、一方では話題に上ったことありますが、1つ1つ平等にというようなことになると非常に時間が掛かると思います。

（青木委員）

難しいですね、それは分かります。

（丸山委員）

今、青木さんがおっしゃったことは大事なことで、全部1個1個やるのは、とても無理かもしれないけれど、多分、事務局にはあると思うのです。例えば、コース制の特徴がどういうふうになっているかとか、あるいはどんな特色づくりがされているかという、簡単なものは教学指導課などで集約していると思います。

そういうことで、やはり前の検討委員会の報告も私は不満なのです。地域や現場でどんな特色づくりや改革をやっているかというものを、十分検討した上ではないのですね。だから、我々の中で、やはりそれを検討した上で、では、どうやっていくかということになるように、全部プレゼンテーションというのは無理かもしれないけれども、そういう簡単な資料で、コース制の特徴とか、あるいはこのような特徴というのは、みんなあると思う。そういう資料はありますよね。

（中村委員長）

共通項目で表形式にできて、その他で特徴をまた述べるという、そのくらいであれば、一度に見ることができるので非常に役に立つと思いますね。

（牧 委員）

すいません、ちょっと今に関連しますけれども、推進委員会のこの会合の中で、どういう内容を検討するのか、これは4項目うたっていますよね。

（中村委員長）

資料4ですか。

（牧 委員）

資料4ではなくて資料3の第2条です。どこまで検討して、その内容を教育委員会のほうに提出するということですよね。私自身も大変素人ですので、これから勉強してもつづさに分らないと思うんですよね。1カ月に1ぺん、もしくは2ぺんというようなお話をなさっていますけどね。ですから、毎回出てこれるかどうかという、その辺も大変自信がなくて申し訳ないですけども。ですから、我々は地域の代表でもなければ何でもないわけで、委員として自分の考えを述べよということですから、それしかできないですよね。数少ない資料の中から自分が考えていることをお話しするしかないわけです。

やはり、今日お越しになっている県の教育委員会の皆さんはプロですから、それなりのことを存じ上げているし、地域の事情、いろいろなことを察したりしたと思うのですよ。ですから、ここで4項目をせめて検討して、ある一定の線が出たら、それを県の教育委員

会のほうに提出するという形でいいと思うのですね。それ以上のことは、我々は知る必要もないのではないかと思いますですよ。それを決めるというのは酷です。そういう委員会だったら、私は下ります。ですから、やはりその辺のところをしっかりこの中で確認してもらいたい。

（中村委員長）

もちろん事務局のほうから検討依頼事項ということで、この資料4をいただいています。少し設置要綱よりは細かい内容がここには出されています。

この内容を検討していく上で、皆さん方からご意見をいただくには、どういう項目でこの推進委員会で推進していったらいいかということでご意見をいただいていますので、当然、事務局から、こういう点をもう少し詳しくというようなことは、私のほうも聞きたいと思います。

ひとまず、この推進委員会を進めていく上では、こういった話し合いをしていかなければいけないものですから、どういう進め方をしたらいいかということですね。おっしゃるとおり、きちんと1回1回で何かを決めていくという点もあろうかと思うのですが、皆さんの意見を聞くという、検討するという段階も非常に大事だと思いますので、その検討段階に応じて、また議題が決まってくると考えております。ぜひお時間をいただいて出席いただきしたいと思います。

今、多様化のあたりと、それから各校の独自な取り組み・特色ですか、そういうまとめの資料をというご意見がありましたが、ほかにありますでしょうか。

なければ、次回の議題については、事務局と打ち合わせて決めてご案内するということでもよろしいでしょうか。多様性のあたりが「魅力ある高等学校づくりに関する事項」として一番上にあがっていますので、この辺を検討いただくということで進めたいと思いますが、よろしいでしょうか。当然、いろいろなことが関連してくると思います。

それでは、ほかに何かご意見等ありましたら。よろしいでしょうか。

特になければ、次回の日程を事務局のほうからお願いしたいと思います。

（三澤教育支援主事）

次回の日程についてであります。委員長さんにもご相談の上、委員の皆さまにまたご連絡申し上げたいと思います。

何か日程のことで特段ございましたら、またこのぐらいの時間がいいというようなことがございましたら、ご意見をいただきたいと思います。

（青木委員）

基本的に、月曜から金曜なのか、土曜・日曜なのか、昼間なのか夜なのか、会議の何日ぐらい前にご案内をいただけるのか、そういう基本的なことだけお伝えいただきたい。

（三澤教育支援主事）

今回につきましては、県の全体の説明ということもありましたので1カ所にお集まりいただきましたが、次回以降はこちらの推進委員会の中で動きますので、皆さんの中でお決めいただければ、土日がいいとか、平日がいいとかというようなことも含めまして決めさせていただければと思っています。日が決まり次第、なるべく早く日程のほうをお伝えするという形になると思います。

（中村委員長）

事務局のお考えはそうなのですが、学校職場とかPTA関係が多いと思います。ですから、土日は結構、行事があつて出られないと思いますので、平日のほうがよろしいかなと思います、いかがでしょうか。

（丸山委員）

行事等が土日が多いので、平日にさせていただいたほうが良いと思います。

（中村委員長）

皆さん、よろしいでしょうか。これは、皆さんにお諮りしながら、希望日を取ってということですか。

（三澤教育支援主事）

いきなりといっても、なかなかできないものですから、どこかで原案を出させていただいて、それがいいかどうかということではいかがでしょうか。

（中村委員長）

はい、分かりました。よろしくお願いいたします。

ご希望の日にちを、また日程の調査をして決めていくということをお願いしたいと思います。できるだけ皆さんにご都合をつけていただいてご参加いただきたいと思いますので。

場所は、先ほど全体会では、各地区でということでしたけれども、その都度、いろいろな場所で開催していくということでしょうか。

（三澤教育支援主事）

場所につきましては、この北信区域の場合であれば、県庁とさせていただけると、比較的こちらも助かるかなとは思っておりますが、空き状況等によっては、また会場を変えてということも考えられます。

（中村委員長）

分かりました。ひとまずは県庁でスタートしていきたいと思います。

（丸山委員）

平日だとしたら、大体午後何時間かという、そういう感じですかね。11時半ごろとか。



(小山(壽)委員)

いや、土日を除かないで考えていただきたいのですが。といいますのは、結構、平日はさまざまな会議がもう既に入っているのです。学校の場合、水曜日は職員会議が確実にございますし、そういう意味で言いますと、もちろん土曜日、日曜日は、特に小中学校でさまざまな日曜日行事がありますので、当然それは避けなければいけないだろうし、自治体の関係者の方も土日に行事が入っているというようなことがあるわけですので、ぜひ土日にやってほしいなどと言うつもりはないのですが、平日に限定されると、またこれもこれでなかなか、もう既に決められた会議が入って、やはり学校の行事が既に予定されていますので、併せて幾つかの候補の中から、それぞれの都合を聞いてというようなことではいかがでしょうか。

(中村委員長)

いったん希望を取らせていただいて、進めたいと思います。

(小山(壽)委員)

今の丸山さんの話にもありました時間帯の問題がありますし、平日で、例えば夜ということであれば、我々の場合には比較的都合がつけやすいということになりますし。お仕事をやっておられる方は、そういうわけにもいかないだろうし。

(中村委員長)

その辺、お願いします。

(三澤教育支援主事)

はい。

(三澤教育支援主事)

今、次の開催時期ということで、月1回か2回ということをお願いするところなのですが、第2回の委員会につきましては、5月中となると今日のいきなり明日ということでは、無理だと思いますが、6月は何日に開催させていただければよろしいのでしょうか。

(中村委員長)

中旬以降ですかね。皆さん現在ご自分の日程を多分お持ちでな方もいると思いますので、また希望調査をして調整の上お願いしたいと思いますが。

(森野副委員長)

3週あたりをお願いできますか。

月も後半に行きますと、だいぶ行事が入っていて、申し訳ないですが。

(中村委員長)

分かりました。第3週を含めて、調査をいったん行いたいと思います。

中旬以降ということで。何かほかになれば、これで。

事務局のほうはよろしいでしょうか。ほかに連絡事項等は。資料はお預けしていいようなことを聞きましたけれども。

(三澤教育支援主事)

すいません、学校要覧の資料は、大変重たいですので、もしお持ち帰りになられてご覧になるのであれば別なのですが、その場に残していただければ、また第2回以降、こちらで机上に用意させていただきたいと思います。

(中村委員長)

それでは、日程につきましては、また事務局からご連絡いただくということで、本日はこれで第1回の推進委員会を終了したいと思います。

皆さん、どうもありがとうございました。